

中古中世の文学作品における仁和寺関連用例

春日美穂

一 はじめに

仁和寺は、京都市右京区御室大内にある、真言宗御室派の総本山である。光孝天皇の御願により造営が始められ、光孝天皇の没後、宇多天皇の御代の仁和四年（八八八）に落慶法要が行われた。三条天皇の皇子であり、後三条天皇の生母禎子を異母妹とする性信をはじめとし、法親王が御室をつとめた門跡寺院である。^①御室は法会や護国修法を行うことで天皇家を支える、天皇家にとって重要な存在であった。^②

仁和寺についての研究は、主に仁和寺が所蔵する文書や、御室や御室がかかわった儀礼の研究と整理^③、仁和寺に関する教学の研究と整理^④、仁和寺が所蔵する美術品や仁和寺の建築に関する研究と整理^⑤などが行われている。また、『仁和寺研究』（第一輯〜第五輯）^⑥として、編年史料を含め、総合的な考察がなされている。

一方で仁和寺は、文学作品の舞台としても多くの作品のなかにあらわれる。『枕草子』『紫式部日記』『栄花物語』には、宮中のなかでの仁和寺の僧達の姿が描かれ、彼らが宮中において重要な位置にいたことがわかる。それは中世の作品になるほど顕著であり、軍記物語には重要な舞台のひとつとして仁和寺があらわれている。しかし、こうした文学作品

品における仁和寺の事例を一覧にまとめたものではなく、それを論じたものもそれほど多くはない。そのため、本稿は、以下に中古中世の文学作品における仁和寺と関連用例についての一覧を掲出し、文学作品のなかでの仁和寺について考えるための一助となることを目指したものである。用例としては、「仁和寺」「御室」「西山」⁸⁾の三例を選び、一覧表とした。

二、仁和寺及び関連用例一覧

用例一覧凡例

- ・ 検索はジャパンナレッジにより、引用本文は新編日本古典文学全集を使用している。
- ・ 「該当箇所等」には、用例自体の頁数を掲出している。掲出している本文はその前後の頁の部分を含んでいる場合がある。
- ・ 巻名を省略したものがあある。
- ・ 「場面」等には場面の紹介や章段、歌番号などを記している。
- ・ 本文の傍線は私に補っている。
- ・ 一部段落をつめている箇所がある。
- ・ 「頭注等」には、新編日本古典文学全集頭注を中心に、その用例に関する頭注を適宜記入している。繰り返しになるもの、新編全集内の別注への指示等は省略している。
- ・ 京都の西山をささない「西山」用例は省略している。
- ・ 仁和寺をささない「御室」用例は省略している。

・『新古今和歌集』の「御室五十首」の掲出歌は「御室五十首」そのものを出典とみなし、掲出から除外した。

仁和寺用例

作品名	該当箇所等	場面等	本文	頭注等
1 古今和歌集	二二六頁 二七九番歌	胡桃色の色紙 の文が届く。	仁和寺に菊の花召しける時に、「歌そへて奉れ」とおほせられければ、よみて奉りける 平貞文 秋をおきて時こそありけれ菊の花移るふからに色のまされば つとめて手洗ひて、「いで、その昨日の巻数」とてこひ出でて、伏し拜みてあげたれば、胡桃色といふ色紙の厚肥えたるを、あやしと思ひて、あけもて行けば、法師のいみじげなる手にて、これをだにかたみと思ふに都には葉がへやしつる椎柴の袖 と書いたり。「いとあさましうねたかりけるわざかな。誰かしたるにかあらむ。仁和寺の僧正のにや」と思へど、「世にかかる事のためはじ。藤大納言ぞ、かの院の別当におはせしかば、そのしたまへることなめり。これを上の御前宮などに、とく聞しめさばや」と思ふに、	京都市右京区御室にある。仁和四年（八八八）、宇多天皇が創建し、出家後、延喜四年（九〇四）から住持せられた。
2 枕草子	二二三段 二五一頁		仁和寺は京都市右京区御室にある真言宗の本山。「にわ」は「にんわ」の仮名表記。寛朝僧正。宇多天皇の皇子敦実親王の三男。円融院の灌頂の師。	

7	6	5	4	3
狭衣物語	狭衣物語	狭衣物語	狭衣物語	紫式部日記
卷一 一一八八頁	卷一 一一八五頁	卷一 一一七六頁	卷一 一一七五頁	二二三頁
狭衣、飛鳥井の女君を寵愛する。	飛鳥井の女君の境遇。	狭衣、仁和寺の威儀師に誘拐された飛鳥井の女君を発見する。	狭衣、仁和寺の威儀師に誘拐された飛鳥井の女君を発見する。	彰子の安産を待ち望む。
あるはまた、「仁和寺の威儀師が盗みたりけむ女か」など、おのおの言ひ合せて、あやしがるべし。	年頃過しけるを、その男失せて後は、いとわりなきありさまにてありければ、仁和寺の威儀師といふ者を語らひて、かれにこの君のことを扱はせけるに、	「何者ぞ」と問へば、「仁和寺に某威儀師と申す人なり。年頃、懸想したまへる人の、太秦に日頃籠りたまへるが、出でたまふとて車借りたまへれば、喜びながら奉りたまひて、姫君一人を盗みて、率ておはするなり。	「下簾かけたまへるは僧綱にこそはおはすらめ。さはありとも、しばし留めては過したまはで、競ひてはやり来る。誰ばかりにかおはすらん」と荒らかに問ふに、「仁和寺の某阿闍梨の御車にて、母上の物へ渡りたまふなり。荒牛にて、心にまかせず走りはべるを」とわななき出づるを、	入げ多くこみては、いとど御心地も苦しうおはしますらむとて、南、東面に出ださせたまうて、さるべきかぎり、この二間のもとにはさぶらぶ。殿の上、讃岐の宰相の君、内蔵の命婦、御几帳のうちに、仁和寺の僧都の君、三井寺の内供の君も召しいれたり。
			山。 京都市右京区御室にある真言宗御室派の大本	濟信権大僧都。

11	10	9	8
栄花物語	栄花物語	栄花物語	栄花物語
卷第十五「うたがひ」 二一―一七五頁	卷第十四「あさみどり」 二一―一六七頁	卷第八「はつはな」 一―三九八頁	卷第三「さまざまのよろこび」 一―一七七頁
道長の病。	師明親王の出家。	彰子の安産を待ち望む。	円融院崩御。
御物の怪ども、いとおどろおどろしうゆゆしくいふも例のことなれど、なほ、いかにと、公私ただ今の大事、これよりほかに何ごとかはと見えたり。仁和寺の僧正なども皆おはす。	院の御情なく見えさせたまふことありて、いみじう恨みきこえさせたまひければ、これを御覧じて、四の宮、いみじく頼みたてまつりたる院の御心掟さはかりにこそおはしましたしけれど、心憂く思されて、忍びて仁和寺におはしましたしにけり。僧正済信の御もとおはしまして、「年ごろ出家の本意深くはべるを、なさせたまへ」と聞えさせたまひければ、僧正、「ともかくも聞えさすべきにもあらず」とて、なしたてまつる。	心嘗阿闍梨は、軍荼利の法なるべし、赤衣着たり。清禪阿闍梨は大威徳を敬ひて腰を屈めたり。仁和寺の僧正は孔雀經の御修法をおこなひたまひ、とくとくと参りかはれば、夜も明け果てぬ。	仁和寺の僧正と聞ゆるは、土御門の源氏の大臣の御はらからにおはす、仁和寺の親王と聞えける御子におはす、いみじう思しまどふ。かの釈尊入滅の心地して、「大師入滅、我随入滅」と僞梵波提が言ひて、水になりて流れけん心地する人いと多かり。
仁和寺の僧正：済信	仁和寺…京都市右京区にある真言宗御室派の総本山。光孝天皇の發願により造宮が始まり、宇多天皇の仁和四年（八八八）に金堂供養が行われた。宇多上皇が出家後に住したため御室と呼ばれる。 済信：真言宗仁和寺の僧。源雅信男で、倫子の兄弟。長和二年正月十四日に権僧正、十二月二十六日に僧正に転ずる。寛仁三年（一〇一九）十月二十日に大僧正。仁和寺僧正と呼ばれる。六十一歳（異説あり）。	仁和寺の僧正：雅慶。真言宗仁和寺。「僧正雅慶、中宮御修善ヲ奉仕ス」（御堂・八月二日）。	寛朝。「仁和寺の僧正と聞ゆるは」は「いみじう思しまどふ」に係る。「土御門の…御子におはす」は寛朝についての系譜説明。

15	14	13	12
大鏡	大鏡	栄花物語	栄花物語
兼通 二二〇頁	師尹 一四一頁	卷第十七「おむかく」 二二二八〇頁	卷第十六「もとのしづく」 二二二四九頁
兼通の子孫	小一条院の弟 妹宮たち	法成寺金堂の 供養。	倫子発願の西 北院での不断 念仏。
師尋清君。堀河殿の御末、かばかりか。 まことや、北面の中納言とかや、世の人の申し時光卿。それ、また、右京大夫にておはせし。この大夫の御子ぞかし、今の仁和寺の別当、律	次の四宮師明親王と申す、幼くより出家して、仁和寺僧正のかしつきものにておはしますめり。	かくてこの南の幄には、仁和寺僧正、禅林寺僧正、山の座主、山階寺僧都などをはじめ、御供に二十余、三十に足らぬほどの僧ども、かたちきよげに丈等しく美々しきを、二十一人続きたちたり。	その事果てて、やがて三日三夜、不断の御念仏山の御念仏のさまをうつしおこなはせたまふ。念仏僧どもは、年十五をきはめにて、十二三四まで選り召したり。山の西塔、東塔、横川、山階寺、仁和寺、三井寺に、おのおの召し集めたり。法師なれど、その人の子ならざらんは参らせず。さるべき上達部、四位、五位までの子どもを参らす。仁和寺の僧正いみじうしてたまひて、十人はかり参らせたまへり。
『小右記』に「仁和寺別当尋清」（長和四年十二月二十一日）と見える。任権律師は、長和六年（一〇一七）三月。	幼くより出家して：師明は寛仁二年八月二十七日仁和寺で出家、十四歳。法名性信。大御室と号した。『栄花物語』卷十四「あさみどり」に詳しい。仁和寺僧正：濟信。左大臣源雅信の子で、寛仁三年に大僧正。「仁和寺」は宇多天皇が建立した寺。	仁和寺の僧正：濟信	仁和寺の僧正：濟信

21	20	19	18	17	16
今昔物語	今昔物語	今昔物語	今昔物語	今昔物語	大鏡
卷第十七 二一三二五頁	卷十五 二一四七頁	卷第十五 二一四六頁	卷第十三 一一三七六頁	卷第十二 一一二〇頁	道長（雑々物語） 三九二頁
蔵算の紹介。	童の往生。	往生した童の紹介。	定修僧都の紹介。	仏の化身が現れる。	源重信の紹介。
今昔、愛宕護ノ山二人ノ僧住ケリ。名ヲバ蔵算ト云フ。仁和寺ノ池上ノ平救阿闍梨ト云フ人ノ弟子也。	如此ク念仏ヲ唱ヘテ、念仏ノ音止ヌレバ、頸ヲ打垂ヒテ死ヌ。其ノ合セタル手ハ然ラ有リ。童部此レヲ見テ、驚テ人ニ告レバ、仁和寺ノ人、員不知ズ集リ来テ、此レヲ見テ、「寄異ノ事也」ト貴ヒテ皆返ニケリ。	今昔、仁和寺ニ觀峰威儀師ト云フ者有ケリ。其ノ從二人ノ童有ケリ。（中略）而ルニ、此ノ童仁和寺ノ西ニ鳴滝ト云フ所ニ行テ、河ニ水ヲ浴テ、	今昔、仁和寺ノ東ニ香隆寺ト云フ寺有リ。其ノ寺定修僧都ト云フ人住ケリ。	亦、僧共ノ見ケレバ、平張ノ下ニ入道殿ノ御マヌ上ノ方ニ香染ノ法服着シタル僧ノ居タレバ、「彼レハ誰ソ。仁和寺ノ濟信大僧正ノ在ヌ也ケリ」ト思テ、皆、僧共歩ビ行クニ、漸ク近ク成ル程ニ、此ノ人不見ヌ成ヌ。	父宮は出家せさせたまひて、仁和寺におはしまししかば、六条殿、修理大夫にておはしまししほどなれば、仁和寺へまゐらせたまふ行き帰りの道を、一度は、東の大宮より上らせたまひて、一条より西さまにおはしまし、
					父宮：敦実親王の出家は天曆四年（九五〇）二月。仁和寺：宇多天皇の御願寺。出家後は寺内の御所に住み、崩御後は、敦実親王に伝えられ、親王も出家してここに入る。現、京都市右京区御室。

中古中世の文学作品における仁和寺関連用例

26	25	24	23	22
保元物語	保元物語	保元物語	保元物語	今昔物語
下 三七〇頁	下 三六九頁	中 三二五頁	中 三二七頁	卷第二十 三―四〇頁
崇徳院の讃岐 行き。	崇徳院の讃岐 行き。	重仁親王の出 家。	新院の出家。	仁和寺成典僧 正、尼の天狗 に会う。
明る廿三日、夜深く、仁和寺殿を出でせたまふ。美濃前司保成が車に召す。佐渡式部大夫重成が下部、御車を仕る。	同じ廿一日、内裏より、藏人右少弁資長朝臣を御使として、仁和寺へ参らせられて、「明日、讃岐国へ移らせおはします。へき」由、申せせたまふ。	また、重仁親王をば、日頃尋ね進らせられけれども、御行く末を知り奉らざりける程に、女房車に召されて、朱雀門の前を通らせたまひけるを、平判官実俊、見付け進らせて、内裏へ告げ申したりければ、御使参りて、「いつくへ候ふぞ」と尋ね申しければ、「出家の為、仁和寺の方へ罷り向ふ」由、御返事あり。	「さて、いつちへかわたらせたまふへき」と申せば、「ざりては、仁和寺の五の宮へ渡すべし。但し、案内をば申すべからず。是非無く御輿を昇き入るべし」と仰せられければ、ふつと昇き入れ進らせて、家弘は北山へ逃げ入りにけり。	今昔、仁和寺二成典僧正ト云フ人有ケリ。俗性ハ藤原ノ氏。広沢ノ寛朝大僧正ヲ師トシテ、真言ノ蜜法受ケテ、年来行法念ル事無クシテ、僧正マデ成上タル人也。然バ、其人仁和寺二行ヒテ居タル、同仁和寺ノ内ノ辰巳ノ角ニ、円堂ト云フ寺有リ。
	合戦の後崇徳院が出家して居所とした。	現在の京都市右京区御室にある、真言宗御室派の総本山。作中時間当時、新院の子の元性法印が住す。	仁和寺は、京都市右京区御室にある真言宗御室派の寺。勅願寺。当時、鳥羽天皇第五皇子、新院の弟である覺性法親王が住していた。	

32	31	30	29	28	27
平治物語	平治物語	平治物語	平治物語	平治物語	保元物語
上 四九〇頁	上 四八〇頁	上 四四一頁	上 四四〇頁	上 四一八頁	下 三七二頁
平治二年正月の様子。	信頼卿、後白河上皇に会うとする	後白河上皇の御幸。	後白河上皇の御幸。	源重成の紹介。	崇徳院の讃岐行き。
平治二年正月一日、あらたまの年に立ち返れども、元日・元三の儀式、事宜しからず。内裏にも、天慶の例として、朝拜も留めらる。上皇は仁和寺にましまして、拝礼もなかりけり。	上皇は仁和寺御室にまします由を承りて、「昔の御恵みの余波ならば、御助けあらんずらん」と思ひ、信頼卿、頸を述べてぞ参りける。	とかくして、仁和寺に着かせおはします。事の由を仰せければ、法親王、大きに御喜びありて、御座しつらひて入れ進らせ、供御など勧め申して、かひがひしくもてなし進らせたまひけり。	急ぎ急ぎ、何方へも御幸ならせおはしまし候へ」と奏しければ、上皇、驚かせたまひて、「仁和寺の方へこそ思し立たぬ」とて、殿上人体に御姿をやつさせたまひて、紛れ出でさせたまひけり。	重成は、保元の乱れの時、讃岐院の仁和寺寛遍法務が坊に打ち籠められてわたらせたまひしを、守護し奉りて、やがて讃岐へ御配流の時、鳥羽まで御供したりし者なり。	新院、御船に召されければ、内裏の御使ひ、御船の屋形に押し籠め奉り、四方を打ち付け、外より鎖をぞ鎖してける。女房たち、今朝仁和寺殿を出でさせおはしましつるやうに、喚き悲しみたまひけり。
	仁和寺には創建者宇多法皇の仙洞御所があり、それを御室と呼んだことから、仁和寺のことを御室とも呼ぶ。こは、仁和寺御室と重ねた。	法親王：皇子で、出家後に親王宣下を受けた人。こは、覚性法親王。	現在の京都市右京区御室にある。仁和四年（八八八）、宇多天皇が創建。以来、皇族が多く入寺。作中間当時、後白河上皇の弟の覚性法親王が入寺していた。	寛遍法務：源氏の出。大納言師忠の息。作中間当時は仁和寺寺務兼法務。	

37 徒然草	36 徒然草	35 方丈記	34 梁塵秘抄	33 平治物語
第五三段 一一二頁 一一三頁	第五二段 一一二頁	二三頁	卷第十 三五八頁	中 四九七頁
是も仁和寺の法師	仁和寺にある法師	仁和寺の隆暁法印 餓死者の数を数える。	乙前の死。	後白河上皇、仁和寺を出て、顕長の宿所に御幸する。
<p>是も仁和寺の法師、童の法師にならんとする名残とて、各あそぶ事ありけるに、酔ひて興に入るあまり、傍らなる足鼎を取りて、頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおし平めて、顔をさし入れて舞ひ出でたるに、満座興に入る事がぎりなし。(中略) 又仁和寺へ帰りて、親しき者、老いたる母など、枕上に寄りあて悲しめども、聞くらんとも覚えす。</p>	<p>仁和寺にある法師、年よるまで、石清水を拝まざりければ、心うく覚えて、ある時思ひ立ちて、ただひとりかちより詣でけり。</p>	<p>仁和寺に隆暁法印といふ人、かくしつ数も知らず、死ぬる事を悲しみて、その首の見ゆるごとに額に阿字を書きて、縁を結ばしむるわざをなんせられける。</p>	<p>そのち、仁和寺理趣三昧に参りて候ひしほどに、二月十九日にはやく隠れにし由を聞きしかば、をしむべき齡にはなけれど、としごろ見馴れしに、あはれさがぎりなく、</p>	<p>同じき六日、一院は仁和寺宮の御所を出でさせたまひて、八条堀川の皇后宮大夫顕長卿の宿所へ御幸なる。</p>
	山。京都市右京区御室にある、真言宗御室派の本		真言宗の門跡寺院。京都市右京区御室にある。	

42	41	40	39	38
平家物語	平家物語	平家物語	平家物語	徒然草
卷第四 一一三三三頁	卷第三 一一二〇二頁	卷第三 一一一九七頁	卷第三 一一一八六頁	第二八段 二五一頁
高倉宮の遣見 の出家。	徳子の出産の 修法の結願。	守覚法親王、 中宮徳子の安 産を祈る。	守覚法親王、 中宮徳子の安 産を祈る。	狐は人に食ひ つくものなり。
女院「なにのやつもあるべからず。ただとうく」として法師になし奉り、尺子にさだまらせ給ひて、仁和寺の御室の御弟子になし参らさせ給ひけり。	御修法の結願に、勸賞共おこなはる。仁和寺御室は、東寺修造せらるべし、并びに後七日の御修法、大元の法、灌頂、興行せらるべき由仰せ下さる。	仁和寺御室は孔雀經の法、天台座主覚快法親王は七仏薬師の法、寺の長吏円惠法親王は金剛童子の法、其外五大虚空蔵、六観音、一字金輪、五壇の法、六字加輪、八字文殊、普賢延命にいたるまで、残る処なう修せられけり。	六月一日、中宮御着帯ありけり。仁和寺の御室守覚法親王、御参内あつて、孔雀經の法をもつて御加持あり。天台座主覚快法親王、同じう参らせ給ひて、変成男子の法を修せらる。	狐は人に食ひつくものなり。堀川殿にて、舎人が寝たるに足を狐に食はる。仁和寺にて、夜本寺の前を通る下法師に、狐三つ飛びかかりて食ひつきければ、刀を抜きてこれをふせぐ間、狐二足を突く。
御室…仁和寺の別称。またその住職をさす。ここは後者で、御室門跡の意。ここは後白河院第一皇子、守覚法親王。北院御室という。建仁二年(一一〇三)没、五十三歳。			御室…仁和寺の別称。転じて管長の意。代々、法親王が継承して、御室門跡という。	

46 春の深山路	45 とはすがたり	44 平家物語	43 平家物語
三三八頁	卷一 二六四頁	卷第七 二一八四頁	卷第七 二一七七頁
方違えの行幸 への供奉。	愷子内親王の 紹介。	平頼盛、都に とどまる。	経正都落
公卿、大炊御門大納言信嗣・中御門大納言経任・左大将・洞院中納言公守卿・子・仁和寺三位頭名卿、頭中将基頭、頭兵衛督為世朝臣、佐、左五人右二人、右少なきによりて、左の下臈右にわたる。	仁和寺の近くに	二門の平家は運つき、既に都を落ちぬ。今は兵衛佐にたすけられんずるにこそ」と宣ひて、都へかへられけるとぞきこえし。八条女院の、仁和寺の常葉殿にわたらせ給ふに、参りこもられり。	修理大夫経盛の子息、皇后宮亮経正、幼少にては仁和寺の御室の御所に、童形にて候はれしかば、かかる念劇の中にも其御名残きツと思ひ出でて、侍五六騎召し具して、仁和寺殿へ馳せ参り、門前にて馬よりおり、申し入れられけるは、
			京都市右京区にある真言宗の寺。宇多天皇が出家後仁和寺に御室を営み住んで後、代々の住職に法親王がなつたので御室の別称をもつ。当時の御室は守覚法親王(後白河天皇第一皇子子。経正が仕えたのはその前代覚性法親王(鳥羽天皇第五皇子。嘉応元年(一一六九)没。

51	50	49	48	47
太平記	沙石集	十訓抄	十訓抄	宇治拾遺物語
卷第二 一一八二頁	巻第五末ノ二 二二〇頁	十ノ十六 四〇四頁	九ノ一 三二六八頁	巻第十四 四三二頁
資朝卿の子息 阿新の佐渡行 きへの決意。	小大進の無実 の罪。	小大進の無実 の罪。	寛助大僧正の 様子	寛朝僧正の勇 力。
この事京都にもその沙汰ありしかば、資朝卿の 息男阿新殿とて、歳十三になり玉ひけるが、父 の卿召人になり玉ひしより、仁和寺なる所に隠 れて御座しけるが、「今は何事にか命をも惜しむ べき。父とともに失はれ、冥途の伴をもすべし。 下つて最後の体をも見奉らん」と、泣き悲しみ ければ、	その後、小大進、召されけれども、「日来、心わ ろき者と思し召されてこそ、かかる心憂き事も 侍れ」とて、仁和寺に籠もり居て、参らざりけり。	すなはち、小大進をば召しけれども、「かかるも んかたを負ふことは、心わるきものにおほしめ さるるやうのあればこそ」とて、やがて仁和寺 なる所に籠もり居にけり。	仁和寺の大御室の御時、成就院僧正の、いまだ 阿闍梨と申しけるころ、白河の九重の御塔供養 ありけり。御室、「このたびの賞あらば、かなら ず譲らむ」と御約束ありければ、かこまり申 し給ふほどに、	今は昔、遍照寺僧正寛朝といふ人、仁和寺をも 知りければ、仁和寺の破れたる所修理せさすと て、番匠どもあまた集ひて作りけり。
京都市右京区花園町御室にある真言宗御室派 の本山。仁和四年（八八八）宇多天皇創建、 上皇となつてから入寺、南側に一宇を造営し て還御、ゆえに御室ともいう。代々、門跡寺院。	京都市右京区御室にある真言宗御室派の総本 山。		京都市右京区にある古義真言宗御室派の大本 山。宇多天皇入寺以降、代々法親王が入住した。	京都市右京区御室にある真言宗の寺院。山号 は大内山。光孝天皇の遺志により、仁和四年 （八八八）宇多天皇が創建。讓位後に居住した ことにより、御室御所と呼ばれる。寛朝の仁 和寺別当就任は康保四年（九六七）。

55	54	53	52
太平記	太平記	太平記	太平記
卷第十五 二二二五三頁	卷第十三 二一一一三頁	卷第五 一一二四八頁	卷第二 一一〇二頁
尊氏の京都への帰還。	公宗卿の北の方の住まい。	二品親王法守の紹介。	俊基卿の北の方の嘆き。
<p>将軍はこの度もまた丹波路へ引かんと、寺戸の辺りまでおはしたりけるが、京中に敵一人もなく、皆引き帰したりと聞えければ、また京へぞ帰り玉ひける。この外、八幡・山崎・宇治・勢田・嵯峨・仁和寺・鞍馬路へ懸かりて、落ち行きける物ども、これを聞きて、我も我もと立ち帰る。</p>	<p>西園寺の一跡をば、竹林院中納言公重卿給はりたりとて、青侍どもあまた来て取りまかなへば、これさへ別れのうき数になりて、北御方は仁和寺なる処に幽なる住処を尋ね出だし、遷り住ませ給ひて、七日七日の御善根、志を尽くされる。</p>	<p>大塔・梨下の両門跡を合はせて御管領ありしかば、御門徒の大衆群集して御拜堂の儀式嚴重なり。これに加へて、御室二品法守は、仁和寺の御門跡に移らせ給ひて、東寺・広沢の法流を受け、瑜伽三密の智水を心底に湛へ御座す。</p>	<p>いまだ盛りにもならぬ花の御姿、墨の衣にやつし替へ、御髪にては自ら三尊一幅の来迎の像を縫はせ、御座せし仁和寺の傍らに柴の菴をかりそめに、結ぶともなき閑居をしめ、一両の伴侶を設け、二六時中の行業には、過去幽霊、出離生死、頓証菩提と祈つては、過ぎ来し方の思ひ出を、</p>
右京区御室大内にある真言宗御室派の総本山。	京都市右京区御室。真言宗御室派の総本山。		

56	太平記	卷第十五 二二―二五頁	尊氏の京都へ の帰還。	「さうば、落さぬ様に、方々へ勢を差し向けよ」とて、鞍馬路へ三千余騎、小原口へ五千余騎、勢田へ一万余騎、宇治へ三千余騎、嵯峨・仁和寺の方までも、洩さぬ様に堅めよとて、千騎・二千騎差し分けて、勢をおかれぬ方はなかりけり。	右京区御室大内にある真言宗御室派の総本山。
----	-----	----------------	----------------	--	-----------------------

御室用例

2	保元物語	下 三九九頁	崇徳院の血で書いた『大乗経』を京に届けようとするがかなわない。	「かかる遠島に置き奉る事いたはしければ、鳥羽・八幡辺にも納め奉るべき」由、御室の御所へ申させたまひける。	京都御室仁和寺の五宮、鳥羽院第五皇子覚性の所。
1	保元物語	下 三九八頁	崇徳院の血で書いた『大乗経』を京に届けようとするがかなわない。	「かかる遠島に置き奉る事いたはしければ、鳥羽・八幡辺にも納め奉るべき」由、御室の御所へ申させたまひける。	京都御室仁和寺の五宮、鳥羽院第五皇子覚性の所。
				本文	頭注等
			崇徳院の血で書いた『大乗経』を京に届けようとするがかなわない。	御室の法親王、これを見進らせたまひて、御涙を流させたまひ、関白殿と様々に執り申させたまひしかども、	仁和寺の覚性法親王。鳥羽上皇の第五皇子。

3	平治物語	中一四八〇頁	信頼卿、後白河上皇に会おうとする。	上皇は仁和寺御室にまします由を承りて、「昔の御恵みの余波ならば、御助けあらんずらん」と思ひ、信頼卿、頸を伸べてぞ参りける。	仁和寺には創建者宇多法皇の仙洞御所があり、それを御室と呼んだことから、仁和寺のことを御室とも呼ぶ。ここは仁和寺御室と重ねた。
4	徒然草	第五四段 一一四頁	御室に、いみじき児のありけるを	御室に、いみじき児のありけるを、いかでさそひ出して遊ばんとたくむ法師どもありて、能あるあそび法師どもなどかたらひて、風流の破子やうのもの、ねんごろに営み出でて	仁和寺の俗称。もと宇多法皇が仁和寺内に設けた住居の通称。やがて仁和寺そのものをも通称した。
5	平家物語	卷第三 一一一八六頁	守覚法親王、中宮徳子の安産を祈る。	六月一日、中宮御着帯ありけり。仁和寺の御室守覚法親王、御参内あつて、孔雀經の法をもつて御加持あり。天台座主覚快法親王、同じう参らせ給ひて、変成男子の法を修せらる。	御室：仁和寺の別称。転じて管長の意。代々、法親王が継承して、御室門跡という。
6	平家物語	卷第三 一一一九七頁	徳子の出産。	仁和寺御室は孔雀經の法、天台座主覚快法親王は七仏薬師の法、寺の長吏円恵法親王は金剛童子の法、其外五大虚空蔵、六観音、一字金輪、五壇の法、六字加輪、八字文殊、普賢延命にいたるまで、残る処なう修せられけり。	
7	平家物語	卷第三 一一二〇二頁	出産の修法の結願。	御修法の結願に、勸賞共おこなはる。仁和寺御室は、東寺修造せらるべし、并びに後七日の御修法、大元の法、灌頂、興行せらるべき由仰せ下せる。	

8	平家物語 卷第四 一―三三三頁	高倉宮の遺児の出家。	女院「なにのやうもあるべからず。ただとうく」とて法師になし奉り、尺子にさだまらせ給ひて、仁和寺の御室の御弟子になし参らさせ給ひけり。	御室：仁和寺の別称。またその住職をさす。ここは後者で、御室門跡の意。ここは後白河院第二皇子、守覚法親王。北院御室という。建仁二年（一一〇三）没、五十三歳。
9	平家物語 卷第七 二―七七頁	經正都落	修理大夫經盛の子息、皇后宮亮經正、幼少にては仁和寺の御室の御所に、童形にて候はれしかば、かかる念劇の中にも其御名残きツと思ひ出でて、侍五六騎召し具して、仁和寺殿へ馳せ参り、門前にて馬よりおり、申し入れられるは、	仁和寺：京都市右京区にある真言宗の寺。宇多天皇が出家後仁和寺に御室を営み住んで後、代々の住職に法親王がなったので御室の別称をもつ。当時の御室は守覚法親王（後白河天皇第二皇子）。經正が仕えたのはその前代覚性法親王（鳥羽天皇第五皇子）。嘉応元年（一一六九）没。
10	平家物語 卷第七 二―七八頁	經正都落	既に甲冑をよろひ弓箭を帯し、あらぬ様なるよそほひに罷りなつて候へば憚存じ候」とぞ申されける。御室哀れにおほしめし、「ただ其すがたを改めずして参れ」とこそ仰せけれ。	
11	平家物語 卷第七 二―七九頁	經正都落	御室やがて御出あつて、御簾たかくあげさせ、「是へこれへ」と召されければ、大床へこそ参られけれ。供に具せられたる藤兵衛有数を召す。（中略）さしもの名物を田舎の塵になさん事、口惜しう候。若し不思議に運命ひらけて、又都へ立ち帰る事候はば、其時こそ猶下しあづかり候はめ」と泣くく申されければ、御室哀れにおほしめし、一首の御詠をあそばはいてくだされけり。	

17	16	15	14	13	12
弁内侍日記	とはずがたり	とはずがたり	とはずがたり	とはずがたり	平家物語
一八〇頁	卷一 二五一頁	卷一 二二六頁	卷一 二二七頁	卷一 二二一頁	卷第七 二一八二頁
藤原公房女死去(傍注)。	作者 御深草院の皇子出産。	着帯の喜び。	後嵯峨法皇の崩御。	女院の出産	経正都落
この暁、御匣殿 <small>御匣殿</small> の御失せさせ給ひぬと聞えし程なれば、よろづ物あはれなり。	御所よりも御室へ申されて、御本坊にて、愛染王の法、鳴薄、延命供とかや、毘沙門堂の僧正、薬師の法、いづれも本坊にて行はる。	病人もいと喜びて、「献盃」など言ひ、営まるるぞ、これや限りとあはれにおぼえはべりし。御室より賜はりて秘蔵せられたりし、塩竈といふ牛をぞ引かれたりし。	十八日、薬草院殿へ送りまゐらせらる。内裏よりも、頭中将御使に参る。御室・円満院・聖護院・菩提院・青蓮院、みなみな御供に参らせたまふ。その夜の御あはれさ、筆にも余りぬべし。	いと弱げなる御気色なれば、御験者近く召されて、御几帳ばかり隔てたり。如法愛染の大阿闍梨にて、大御室御伺候ありしを、近く入れまゐらせて、「かなふまじき御気色に見えさせたまふ。いかがしはべるべき」と申されしかば、	三曲のうちに上玄石上是なり。其後は君も臣もおそれさせ給ひて、此御琵琶をあそばしひく事もせさせ給はず。御室へ参らせたりけるを、経正の幼少の時、御最愛の童形たるによつて、下しあづかりたりけるとかや。
底本傍注。後嵯峨院妃、太政大臣藤原公房女のちの仁和寺性助法親王を産み、難産のため没。	仁和寺性助法親王。	性助法親王。	性助法親王。以下の四人とともに後嵯峨法皇の皇子。この年二十六歳。	仁和寺御室。性助法親王のことをさすか。後嵯峨院の皇子。俗名は省仁。母は太政大臣藤原公房の女。後深草院の異母弟。「有明の月」に擬されている。文永八年には二十五歳。弘安五年(一二八)十二月十九日没三十八歳。『続古今集』以下の歌人。	

20 沙石集	19 沙石集	18 十訓抄
卷第六ノ十 三三七頁	卷第三ノ三 一五〇頁	下—三六八頁
後鳥羽院、高野の御室に逆修を送る。	慈鎮和尚の房官と御室の房	寛助僧正の様子
故持明院の御室に、高野の御室と御坐しけるに、隠岐の御所より、梵字を御自筆にあそばして、	故吉水の慈鎮和尚の御房に房官ありけり。また御室の御所に房官ありけり。共に名人なりけるが、二人ながら猿に少しもたがはず。猿房官とて人々に愛し笑はれける。共にさかさかしき者にて召し仕はれけり。ある時、御室より件の房官、吉水の御所へ御使に参る。	仁和寺の大御室の御時、成就院僧正の、いまだ阿闍梨と申しけるころ、白河の九重の御塔供養ありけり。御室、「このたびの賞あらば、かならず譲らむ」と御約束ありければ、かしまり申し給ふほどに、思ひのごとく供養とげられて、賞行はる時になりて、京極大殿の御子息、阿闍梨にて、御弟子にて候ひ給ひけるに、「中略」御室は、「かの阿闍梨、いかにくちをしと思ふらむ」と、胸ふさがりておぼしめしけるに、その日、ふつと見えざりければ、「中略」つゆもつらみたる気色なかりけり。御室、うれしくも、あはれに思しめしければ、今度こそ越えられにけれども、
道助入道親王。後鳥羽天皇皇子。建永元年（一一〇六）出家。道法法親王の跡を襲い、御室となる。寛喜三年に寺務を道深法親王に譲り、高野山に籠居。建長元年（一一四九）没。五四歳。	仁和寺の門跡の称。歴代、法皇、法親王が門跡となる。	仁和寺：京都市右京区にある古義真言宗御室派の大本山。宇多天皇入寺以降、代々法親王が入住した。御室：性信法親王（一〇〇五～八五）。平安後期の僧。三条天皇皇子。仁和寺門主。孔雀経法の験者として知られる。

22	21
沙石集	沙石集
卷十本の八 五五六、 五五七頁	卷第十本ノ八 五五四頁
高野の大御室 の法験	金剛院僧正の 牛飼い、御室 の車を壊す。
<p>「高野の大御室こそ、頼もしくおはすれ」とて、錦の袋に姫君を入れて、我が首に懸けて、高野山へ馳せ行きて、事の子細申し入れ給ひければ、「幼くおはしませども、女人なれば、惣門の内は入り給ふまじ」とて、五鈷計り持ちて、門の外で加持し給ひければ、蘇生して、遂に後に立ち給ひにけり。後の御名をも承りしが、忘却し侍るなるべし。大御室は、殊に慈悲深くして、仏法の功験もあらたにこそ聞こゆれ。御室の御所には、御架の菓子色々と参らす事にてなんあるに、この菓子、夜々失せければ、近習の人々、あさましく思ひて、うかがひ見る。夜更け、人静まりて、長高き僧の白衣なるが、長き袋を以て、御架の菓子を取り入れけり。「誰ならん」と見れば、御所にておはしましけり。さて袋を打ちかつぎて出給ふを、度々に見奉れば、大内裏の築垣の外に諸々の非人・乞匄・病者の出されたるが、加持して給ひければ、病も癒えにけり。</p>	<p>故金剛王院僧正、公請勤められけるに、僧正の牛飼、御室の御車と車立論じて、御室の御車を散々としたりけるを、侍坊官、牛飼を制しかねて、僧正に、「しかしか」と申されければ、「某丸が申す僻事なし。子細を知りてこそ申せ。東寺の一の長者の上に居る僧無し。御室は上臈はさる御事なれども、遁世門の御振舞にて、室に引き籠りて、昔より御室と申す。御車に召すべきにあらねば、勿論の事なれども、世に随ふ事なれば制せよ」とぞ、下知せられける。</p>
<p>大御室：性信。三条天皇皇子。仁和寺二世。仁和寺の濟信より得度し、伝法灌頂を受ける。顕密に通じ、よく法験を現したという。応徳二年（一〇八五）没。八一歳。御室の御所：仁和寺のこと。京都市右京区御室大内に所在。光孝天皇の御廟所として起工、宇多天皇が完成させる。讓位し出家した宇多法皇が仁和寺第一世となった。法務の在所として室（僧房）を造ったのが、御室という尊称の起源。「御所」はここではその主の親王をさす。</p>	<p>仁和寺御室。道助法親王をさすか。道助は光台院御室と称す。後鳥羽天皇の皇子。任味道法法親王の室に入り出家。晩年は高野山に隠棲した。建長元年（一二四九）没。五四歳。</p>

24	23
太平記	沙石集
卷第五 一一二四八頁	卷第十末ノ 十一 五九三頁
二品親王法守 の紹介。	開田御室
<p>大塔・梨下の両門跡を合はせて御管領ありしかば、御門徒の大衆群集して御拝堂の儀式嚴重なり。これに加へて、御室二品親王法守は、仁和寺の御門跡に移らせ給ひて、東寺・広沢の法流を受け、瑜伽三密の智水を心底に湛へ御座す。</p>	<p>また、開田の准后御室の、東大寺にして御受戒の時、雪夥しく降りて、石壇の上まで、風吹き、雪積れり。石壇の上には、足駄履かめ事なれば、「あの御足駄、脱がれ候へ、脱がれ候へ」と大衆どもも云ひけり。ある大衆の申しけるは、「田舎大衆かな。折にこそよれ。ただ召され候へ」と申しければ、既に脱がんとし給ひけるが、召してけり。実にも格式なり。さる事なれども、「禪師君の、雪の上裸足にておはせんも、いたはしかるべし」と思ひて、申しける。実に格を越えたる心なり。(中略)御室の御気色然るべき由、聞こえき。真言の秘事までも給はりける。ありがたかりける、格に閑はらぬ心なり。</p>
<p>京都市右京区花園。法守は後伏見天皇第三皇子。御室十八世。『仁和寺御伝』によれば、法守は嘉暦二年(一一三二)仁和寺寺務となり、十二月に二品に叙せられている。</p>	<p>法助。藤原道長の五男。嘉禎四年(一一三八)仁和寺道深について出家し、同年(一一三九)一〇日、東大寺戒壇院で受戒した。延応元年(一一三九)一身阿闍梨准三后となり、仁和寺第十世となった。正嘉二年(一一五八)山城国乙訓の開田院に隠棲した。弘安七年(一一八四)没。五八歳。</p>

西山用例

	作品名	該当箇所等	場面等	本文	頭注等
1	蜻蛉日記	中巻二二六頁	兼家との関係に悩み、西山にいく。	さて思ふに、かくだに思ひ出づるもむつかしく、さきのやうにやくやしきこともこそあれ、なほしばし身を去りなむと思ひ立ちて、西山に、例のものする寺あり、そちものしなむ、かの物忌果てぬさきにとて、四日、出で立つ。	般若寺。この寺は現存しないが、京都市右京区に鳴滝般若寺町の名があり、小さな稲荷の祠の前に、「五台山般若寺」と刻んだ石碑が立っている。
2	蜻蛉日記	中巻二四六頁	尚侍からの文に返事を書く。	また、尚侍の殿よりとひたまへる御返りに、心細く書き書きて、上文に、「西山より」と書いたるを、いかが思しけむ、またある御返りに、「東の大里より」とあるを、いとをかしと思ひけむも、いかなる心々に見たるにかありけむ。	
3	うつほ物語	「国譲下」 三一三九一頁	朱雀院の二の皇子の紹介。	上たちも御詩遊ばす。親王たち、上達部、御心に任せて作りたまふもあり。朱雀院の皇子たちは、后腹の二の皇子は、御病して法師になりたまひて、西山におはす。	京都西北部の山々の総称。愛宕山・小倉山・烏ヶ岳、嵐山などが連なる。
4	源氏物語	「若菜上」 四一―一八頁	朱雀院 出家をいそぐ。	西山なる御寺造りはてて、移ろはせたまはんほどの御いそぎをせさせたまふにそへて、またこの宮の御装着のことを思しいそがせたまふ。	「西山」は、京都西郊の山々をいうが、この「西山なる御寺」は、古来仁和寺に擬せられてゐる。
5	更級日記	三三二頁	孝標女、西山で父と再会する。	あづまに下りし親、からうじてのぼりて、西山なる所におちつきたれば、そこにみな渡りて見るに、いみじううれしきに、月の明き夜一夜、物語などして、	京都市の西北部。衣笠山付近。

10	9	8	7	6
狭衣物語	夜の寢覚	夜の寢覚	夜の寢覚め	更級日記
巻一 二二八頁	巻四 四二八頁	巻四 四〇五頁	巻四 三四七頁	三五〇頁
乳母、女君の 他出を強要。	内大臣、西山 の寢覚の上を 訪れることが 出来ない。	寢覚の上、兄 に西山に移る 決意を伝える。	寢覚の上、宰相 の上と身の上 を嘆く。	孝標女、西山 を訪れる。
「そ思しめさば、常磐殿へ渡らせたまへかし」と 言ふは、この中納言の領せし西山のわたりにぞ ありける。	なやみたまひなどするに、また添ひさぶらひた まふに、またつゆの御暇なくて、西山には、思 ふままにだに、え立ち寄りたまはず。	近きほどなれば、おのつから小姫君など見に立 ち寄りたまふめる、聞きにくかめれど、『なもの したまひそ』などきこえむも、うたてあり、『御 心地のかからむほど、西山に参りてあらばや』 とこそ思ひはべれ。	明けぬるに、御前の御格子一間ばかりまあらせ て、二所ながら、端におざり出でたまひつれば、 名に流れたる曙の空霞みわたり、今開けそむる 花の木末ども、似るものなきほどなるに、いに しへ、西山にて、「見しながらなる」とながめし ほどの嘆かしさ、身の有様	弥生のついたちごろに、西山の奥なる所に行き たる、人目も見えず、のどのどと霞みわたりた るに、あはれに心ほそく、花ばかり咲きみだれ たり。
京都市西郊の双が岡辺の丘陵。ここでは常磐 殿の場所を指示する。	寢覚の上の滞在する広沢には。	父入道が隠棲している広沢の地をいう。	いにしへの：かつて寢覚の上が父入道の広沢 の家に引き取られた折のことであろう。	京都市の西北部。衣笠山付近。

15	14	13	12	11
平家物語	徒然草	梁塵秘抄	今昔物語	今昔物語
卷第三 一一二六〇頁	第一八八段 二二〇頁	卷第一 二八八頁	卷第二十三 三一〇二頁	卷第一七 二二九〇頁
鳥羽殿からの 眺め	或者、子を法 師になして	三八五	陸奥前司橘則 光切殺人語第 十五	西岩藏仙久知 普賢化身語第 三九
おほ寺の鐘の聲、遺愛寺の間を驚かし、西山の雪の色、香炉峰の望をもよほす。	おほ寺の鐘の聲、遺愛寺の間を驚かし、西山の雪の色、香炉峰の望をもよほす。	京にすむ人、いそぎて東山に用ありて、既に行きつきたりとも、西山に行きてその益まさるべき事を思ひ得たらば、門より歸りて西山へ行くべきなり。ここまで来つきぬれば、この事をば先づ言ひてん。日をささめ事なれば、西山の事は、歸りて又こそ思ひ立ためと思ふ故に、一時の懈怠、すなはち一生の懈怠となる。これを恐るべし。	則光、「極テ恐シ」ト思ヒ乍ラ過ル程ニ、八月九日許ノ月ノ、西山ノ葉近ク成タレバ、西大垣ノ辺ハ景ニテ、人ノ立テルモ慥ニモ不見又ニ、大垣ノ方ヨリ音許シテ、	今昔、京ノ西山ニ西石蔵ト云フ山寺有リ。其ノ山寺ニ仙久ト云フ持經者在リ。
	京都の西郊を南北に走る山脈。嵐山・愛宕山などを含む地帯。	京都西郊、嵐山あたりをさすか。	葉近ク：「葉」は「端」の借字で、「山ノ端」に同じ。	石蔵：石蔵 未詳。なお、「石蔵」↓寺社名。

19	18	17	16
建礼門院 右京大夫集	建礼門院 右京大夫集	平家物語	平家物語
八六頁	五三頁	卷第八 二一九七頁	卷第五 一四一〇頁
八十三 花の姿	三十五 深きみ山のも みち	山門御幸	都帰
<p>八十三 花の姿</p> <p>西山なる所に住みしころ、遙かなるほど、ことしげき身のいとまなさにことつけてや、久しく音もせず。枯れたる花のありしに、ふと、</p> <p>とはれぬは幾日ぞとだに数へぬに花の姿ぞ知らせがほなる</p>	<p>三十五 深きみ山のもみち</p> <p>忠度の朝臣の、「西山」紅葉見たる」とて、なべてならぬ枝をおこせて、結び付けたる。君に思ひ深きみ山のもみちをは嵐のひまに折りぞ知らする</p>	<p>法皇は仙洞を出でて天台山に、主上は鳳闕をさつて西海へ、摂政殿は吉野の奥とかや。女院、宮々は八幡、賀茂、嵯峨、太秦、西山、東山のかたほとりについて、にげかくれさせ給へり。</p>	<p>去六月より、屋どもこぼち寄せ、資財雑具はこびくだし、形のごとくとりたてたりつるに、又物ぐるはしう都がへりありければ、なんの沙汰にも及ばず、うちすて打ちすてのぼられけり。おのくすみかもなくして、八幡、賀茂、嵯峨、太秦、西山、東山のかたほとりについて、御堂の廻廊、社の拝殿などにたち宿つてぞ、しかるべき人々もましましける。</p>
<p>一説に京都西山善峰寺の僧功かという。</p>	<p>京都の西部の山。嵐山などがある。</p>		

26	25	24	23	22	21	20
太平記	太平記	太平記	沙石集	沙石集	宇治拾遺物語	春の深山路
卷第十四 二一九七頁	卷第八 一四一八頁	卷第八 一四一〇頁	卷第六ノ七 三二九頁	卷第五末ノ二 二七三頁	卷第十一 三四八頁	三七三頁
大渡山崎合戦。	千種忠頭の撤退。	浄尊法親王の陣。	浄土宗西山派を開いた証空のことが。	後藤基政の連歌のこと。	則光、盗人を斬る事	老蘇より番場の宿までの
二条帥大納言殿の西山の峯の堂に陣を取つて御座しけるを追ひ落して、正月八日夜半ばかりに、大江山の手向に篝火をぞ炒きたりける。	千種殿西山の陣を落ち玉ひぬと聞えしかば、四月九日、京中の軍勢、谷堂・峰堂・浄住寺・松尾・万石大路・羽室・衣笠に乱れ入つて、	宮、篠村を御立ちあつて、西山の峰堂を御陣に食さる。	念仏宗も、学を本として余教を誹謗すれば、謗法の過積もり、念仏の功は疎かなる、僻事なり。西山の古人の説には、「双紙形を脇挟みて、浄土宗を学する程の者、臨終のよきを見ず」といへり。	後藤吉岐守基政が、在京の時、西山の花見で帰りけるが、鞍に桜花を一房差して、京中を帰るに、ある棧敷の中より、女房の中より、言ひかけける。	大宮を下りに行きければ、大垣の内に人の立てる気色のしければ、恐ろしと思ひて過ぎける程に、八九日の夜更けて、月は西山に近くなりたれば、西の大垣の内は影にて人の立てらんも見えぬに、	小倉といふ里の名を都の西山おほえて、住み慣れしことさへ思ひ出たりける。
京都市西京区御陵峰ヶ堂の法華山寺。		京都の西方の山の意で、大原のあたりを中心とした地。	浄土宗西山派を開いた証空か。以下の説、出典未勘。	京都市西郊の山地。		

27	太平記	卷第二十一 三一六四頁	佐々木塩冶判官高貞、拳兵の覚悟をする。	二心なき家子・若党三十余人をば、狩装束に出で立たせ、小鷹手ごとくに据ゑさせて、西山辺に遊獵して懸鶉のためと披露して、寺戸の前を山崎へ、播磨路の中道を我が国へとぞ急ぎける。	京都市の衣笠・御室の辺から、大山崎の天王山にかけての丘陵地帯。
28	太平記	卷三十一 四一三二頁	武蔵将監の軍勢。	宰相中将殿に力を合はせんために、西山の吉峰に陳を取つてぞ居たりける。	西京区大原野小塩町。釈迦岳山腹に天台宗善峰寺がある。山号を西山という。
29	謡曲集 『嵐山』	一一九二頁	木守・勝手の神が去る。	明日もみ吉野の山桜、立ち来る雲にうち乗りて、夕陽残る西山や、南の方に行きにけり。	嵐山を含む、京都の西方の山々。
30	謡曲集 『西行桜』	一一四八九頁	西行の庵室。	今日はまた西山西行の庵室の花、盛りなるよし承り及び候ふほどに、花見の人々を伴ひ、ただいま西山西行の庵室へと急ぎ候。	京都西方の山地。
31	ものくさ太郎	一五七頁	都の様子。	東山西山、御所内裏、堂宮社、おもしろく尊さ、申すはかりなし。	以下、京都の様子をいう。東山は京都市東方の丘陵、西山は西方の山脈。

三、おわりに

中古、中世の文学作品における仁和寺及び関連用例についての一覧を掲出した。今回は新編日本古典文学全集に採録されていない作品は一覧に入れていないため、今後さらに補足していく必要がある。また、文学作品における仁和寺及び関連用例について考慮するためには、仏教学の知見も不可欠である。今後、仏教学の知見もふまえながら、文学作品における仁和寺についてさらに考察し、作品の読みに還元する必要がある。

註

- (1) 福山敏男氏「仁和寺の創立」(『日本古代学論集』古代文学協会 一九七九年)、堀内規之氏「仁和寺御室と教学研究」(『済暹教学の研究』ノンブル社 二〇〇九年)、『国史大辞典』吉川弘文館。
- (2) 堀内氏註(1)。
- (3) 阿部泰郎氏、山崎誠氏編『守覚法親王の儀礼世界——仁和寺藏紺表紙小双紙の研究』(勉誠社 一九九五年)、『守覚法親王の儀礼世界——仁和寺藏紺表紙小双紙の研究 資料篇』(勉誠社 一九九八年)、奈良文化財研究所編『仁和寺史料』古文書編一、寺誌編一、二(吉川弘文館 二〇一三年)など。
- (4) 堀内規之氏『済暹教学の研究』(ノンブル社 二〇〇九年)など。
- (5) 浜田隆氏編『日本古寺美術全集 醍醐寺と仁和寺・大覚寺』(集英社 一九八二年)など。
- (6) 『仁和寺研究』第一輯〜第五輯(吉川弘文館 一九九九〜二〇〇五年)。
- (7) 文学作品の中の仁和寺については、『源氏物語』「西山」用例について、浅尾広良氏「朱雀院の出家——「西山なる御寺」仁和寺准拠の意味——」(『源氏物語の准拠と系譜』翰林書房 二〇〇四年)や、春日美穂「山をおりる朱雀院」(『源氏物語の帝——人物と表現の連関』おうふう 二〇〇九年)がある。
- (8) 『源氏物語』「若菜上」巻にみられる「西山」の例が、『源氏物語』の古注釈書である『河海抄』(『李部王記』云天曆三年四月十五日太上天皇遷御仁和寺院廬子)、『紫明抄・河海抄』(角川書店 四六一頁)をはじめとし、仁和寺をさすという指摘がなされてきたため「西山」用例も一覽表化した。この問題は『源氏物語』朱雀帝の准拠の問題とも深く関わっている(縄野邦雄氏「『源氏物語』第二部の朱雀院について——宇多院の准拠を手がかりに——」『中古文学』第五七号 一九九六年、浅尾広良氏註(7)の論考)。なお、西山の用例は仁和寺を明確にさすものではなく、『源氏物語』の例だけが仁和寺と関連させて考えられてきたことは改めて注目される。

付記 本稿は「中古・中世の古典文学作品における仁和寺の研究」として、平成二十八年度大正大学学術研究助成金を得た研究成果の一部である。ご助言くださった大正大学文学部教授三角洋一先生、大正大学仏教学部准教授堀内規之先生に御礼申し上げます。